

彫って摺って重ねる生き方

長谷川雄一さん（昭和 20 年生 版画家 南会津町）

長谷川雄一さんは南会津町の自宅と、三島町の旧分校に構えた“子午線工房”を行ったり来たりしながら、創作活動を行う版画家だ。

奥会津の自然に魅せられ、万物の造形や自然が放つ生命力を特殊な版画技法で表現している。



「一木（いちぼく）原版（げんぱん）刷（ずり）」という 1 枚の版木を 1 色摺るごとに彫り進め、10 色以上の多色を摺り上げる独特の技法で作品に向き合う。

また、ひとつの作品の中には木版、油絵、漆、柿渋、和紙、墨、コラージュと多彩な技法が組み込まれている。

会津若松の漆職人の家に生まれ、水彩画を学び、油絵や木彫をやりながら、斎藤清氏に私淑して版画の道に入った。

「教えてもらう」ということはなかった。先達たちの技法を見て学び、今までの経験と興味から独自の画法を生み出していったのだ。

また、長谷川さんの創作活動は人とのつながりに大きな影響を受けた。

課題を投げかけてくれる師、刺激を共有する仲間、支えてくれる画商との出逢いからいただいたきっかけが、今までの作品に繋がっていった。

「自分以外はすべてが対象物。

スケッチはやらない。コラージュがデッサンで、下絵にあたるもの。

机の上にはわくわくするような鮮やかなコラージュが無数に広がる。

このコラージュから、次なる作品の着想を得て、木版を彫る、摺る、重ねる、を繰り返していく。

工房の窓から一日外を眺めていると、移り行く陽の傾きで空も土も、色彩が変幻する。

昨日と今日で、壁を這っていた蔦も、向かいの庭に生える草の風貌も移ろう。

見たもののイメージを記憶して、その残像を温め、頭の中で再構成してみる。

ただただ感じたものを自己消化して、“今”を表現する。

「同じものは作れない。どうやって作ったのかもわからないんだよね」。

自分が創っているようで、実は自然の作用に創られているような感覚もあるという。

分からないことが楽しい。それを調べたり勉強すれば、発見に至れる。

考えて、行動を起こし、何とか長谷川さんなりに“答え”を見つける過程が重要なのだ。

「わかったらこれ以上求めない。わからないから今まで続けてこられたのだと思う」。

わからないことをわかりたい、知りたいと思う好奇心のカタチが、長谷川さんの創作活動から生まれた作品なのだ。



「リンゴを、見るのではない」。

かつての師匠から言われたことを、いつも大切にしている。

そのリンゴが経た時間と、置かれた空間、その背景に意識を向けて、“間”を理解しようとすることに、終わりはない。

「人生も、そんなものでしょう」。

優しく微笑む視線の先に、これ

からどんなものが見えてくるのか、楽しみで仕方がない。